

Le style parisien (ル・スタイル・パリジャン)

→ Les élégances parisiennes : publication officielle des Industries françaises de la mode (レゼレガンス・パリジェンヌ)

Paris : Librairie, 1915 — 1924

Hiler p.268, 822 Colas 950

第一次世界大戦中、フランスの婦人服仕立て業（クチュール）や服飾業（モード）の業界は外国向け情報誌の配本拡大の販売方針を決定した。1916年の4月には大判の月刊誌「優雅なパリっ子（Les élégances parisiennes 1916—1924）」がHachette社から創刊され、豊富な図版を掲載したこの情報誌は外国人にフランス・モードを伝える最も良い手段となった。毎号の“最新のモード作品集”のページには解説と共に美しく彩色された小さな図版が貼付されていた。そこにはウォルト（Worth）、ランヴァン（Lanvin）、ベア（Beer）、シェリュイ（Chéruit）、ジャンヌ・デュク（Jeanne Duc）、パキヤン（Paquin）、ポワレ（Poiret）のモデルたちが参加していた。

「優雅なパリっ子」創刊号の読者に向けての記述によると、18世紀には外国の宮廷貴婦人向けに、毎月パリから当時のモード衣装を着た人形が入った小さな箱が送り出されていた。その箱の人形が当時のモード伝播の役目を担っていたが、人形はモード誌にとって代われ、モード誌が世界中に豊富に出回っていった。しかし、何年かはパリのデザインを伝播していた刊行物がウィーンかドイツのものであったので、モード産業界は「優雅なパリっ子」を出版することでこのような事態に終止符を打った。この情報誌は商売人やバイヤーにフランス・モードの新製品についての正確で詳しい情報を提供した。

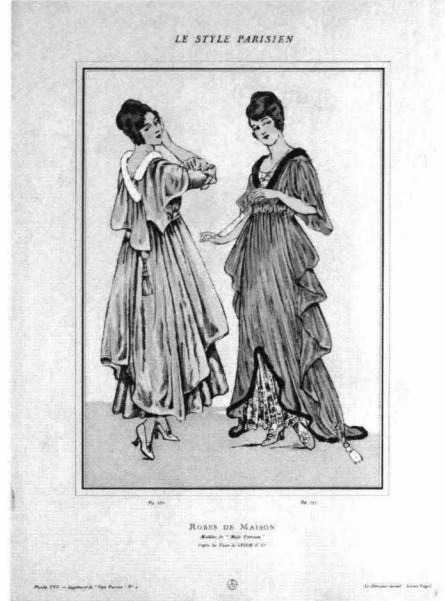
リュシアン・ヴォージェル（Lucien Vogel）が1915年8月にすでに発行を試みていた「パリジャンのスタイル（Le style parisien）」は同じ編集コンセプトとしていたことで、1916年2月をもって「優雅なパリっ子」に吸収された。では、先に発行されていたこの「パリジャンのスタイル」はどのような意図で刊行されていたのだろうか。この創刊号では読者に向けて、「当時のフランスの市場は外国企業によって占められ、モード関係の出版物も外国の侵略から逃れることはできなかった。フランスで成功を取めた多くの雑誌は、ベルリン、ウィーン、フランクフルトで出版され、“パリの”といってもその出所は明らかであった。デザインとエスプリ（精神）が愚鈍であったにもかかわらず、フランスのクチュリエの創作からの盗用によってしか作られていない作品のレパトリーの中にアイデアを求めていた。そのようなことから、それらの雑誌にとって代わる新しい雑誌を作る必要性があった」と記述されていた。

この「パリジャンのスタイル」の第3号と第4号の2冊は英文で書かれており、第3号の巻頭ページで、「フランス・グラン・クチュール擁護組合（サンジカ Le Syndicat de Défense de La Grande Couture Française）とその関連産業」という記事を掲載している。この「サンジカ」は、ポワレ（Paul Poiret 1879—1944）が1913年の第1回アメリカ旅行後、アメリカで体験した意匠権侵害問題を無視できず立ち上げた会だったが、意匠権侵害を組織的に防ぐことが不可能なのを証明したに過ぎ

なかった。設立時の「サンジカ」のメンバーには、キャロ (Callot)、シェリュイ、パキャン、ポワレ会長、プレメ (Premet)、ウォルト副会長や Bianchini, Rodier, Lucien Vogel & Co.の企業、工場関係等が参加していた。1915年には、ドゥセ (Doucet)、ランヴァン、最後にはジェニー (Jenny) の会社も加わった。(佐藤俊子)



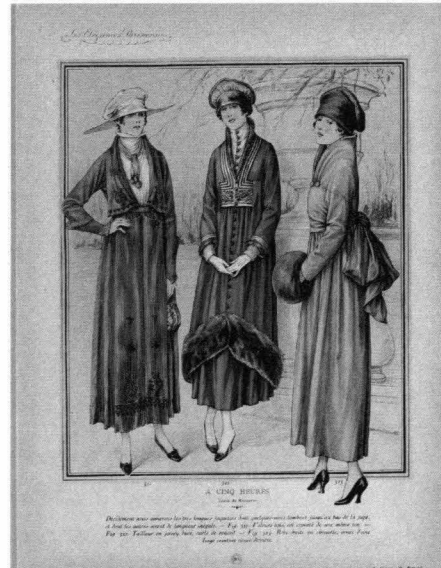
1915年「ル・スタイル・パリジャン」ウールのテイラードスーツ



1915年「ル・スタイル・パリジャン」ハウスドレス



1916年「レゼレガンス・パリジェンヌ」イブニングコート



1917年「レゼレガンス・パリジェンヌ」5時に